

## 臨床検査技師の活躍の場を考える ～検査室から多様な世界へ～

### 演題1：検査室勤務を経て県政の場へ ～県民の医療と健康を守るために～

半沢 雄助

福島県議会

【県政の場を目指すまで】臨床検査技師として13年間、臨床で働きながら研究・学術活動、労働組合活動、趣味の創作和太鼓など様々な場でいろんな経験をさせていただきました。今の立場になる際に最も影響を受けたのが労働組合活動です。組合活動を通して、過去の給与制度の見直しで私たちの給与が大幅に改悪されたことを学びました。また労働関係法令など私たちの働き方に直結する法律・制度は全て政治が深く関与しており、政治に参加することの重要性も学びました。労働組合での要求・交渉も大切ですが、議会の場で議員の口からも訴えなければ根本的な解決にはなりません。私たちと一緒に取り組み給与制度改善に導いてくれたのが、臨床検査技師の先輩で当時現役の県議会議員だった方でした。その先輩議員の存在が議員を志すきっかけにもなっています。

【今後の取り組み】臨床検査技師は病院や検診センターなどで必要不可欠な職種でありながら、患者さんや行政の場では認知度が低い職種だと感じています。また、AIの進歩や自動化が進み機械に置き換わっていく職種ともいわれています。一方で、自動化が進む中でも人の手でしかできない仕事があります。きめ細やかな仕事と質の高い検査技術が診療業務への貢献や患者サービスの向上につながります。ひいては患者さん、県民の皆さんの安心・安全な医療にもつながると信じています。

職域を確保するためにも現場の皆さんと意見交換しながら臨床検査技師の重要性を発信し、若手の皆さんが明るい将来を展望できる検査業界になるよう微力ながら力を注ぎたいと思います。

### 演題2：検査室勤務を経てプロフェッショナルリズムを極める ～留学・海外ラボへ～

柳田 絵美衣

Department of Pathology and Laboratory Medicine, Memorial Sloan Kettering Cancer Center

現在、がん治療・研究分野で世界ランキング第2位のMSKCCでAI病理ラボで研究をしている。臨床検査技師は私の天職だと思う。米国の学会で発表&受賞し、複数の研究に携わっている。日本では検査の学校で病理学の非常勤講師、ISO15189の技術審査員、書籍を監修&執筆、これまでした講演回数93回、学会発表回数51回、受賞回数5回、臨床病理領域で最高峰の雑誌AJSPに論文がアクセプト、専門誌で10年以上エッセーを連載、YAHOO!ニュース個人のオーサー、漫画の登場人物のモデル…など、文字にすれば華やかに見える。しかし学生時代は「超」が付く落ちこぼれ。国家試験の模試では判定は常に「D」、定期試験は常に赤点、卒業直前まで一人残って追試。

だからこそ、この身をもって証明した私は断言できる。私ほどの落ちこぼれはいない。だから、誰もが絶対に私以上になれる。

**演題3：検査室勤務を経て検査技師養成の立場から医療を支える**

丹野 大樹

福島県立医科大学 保健科学部 臨床検査学科

臨床検査技師養成校の卒業生には一昔前には考えられなかったほど多様な進路が拓かれている。私の学生時代の同級生ですら、臨床検査技師として病院に就職する者だけでなく、一般企業に就職する者、研究者の道を志す者など多種多様であった。その中で、私のように病院就職を経て大学教員の道を志す者は当時としては非常に珍しく、少数派であるが故の葛藤に苦しみながらも夢を諦めずに道なき道を進んできた。私が大学教員を目指すうえで重要視していたのは「臨床経験」と「研究業績」である。特に臨床経験は、現在の学生教育に多大な好影響をもたらしているだけでなく、研究においても臨床経験から得た着想により独創的な臨床検査の研究につながっている。これから教員を志す若者にも臨床経験を積むことを是非お勧めしたい。

本演題では、上記のような教員になるまでの道のりをお話するとともに、臨床検査の研究を発展させていくことの意義、そして教員の立場から臨床検査を支える想いについてお話しさせていただきたい。本演題が、同じ志を持つ若者に勇気を与える一つの良いきっかけになれば幸いである。

**演題4：大学病院検査室の経験を活かしてスキルアップすることの重要性を考える**

鈴木 千恵

東北大学病院 診療技術部 臨床検査部門

臨床検査技師養成課程を有する大学の卒後進路は、大学院進学、病院勤務、検査試薬・機器・製薬メーカー、教育研究機関など多様である。進路決定には、講義や学内実習での検査技術への興味関心、臨地実習での医療人としての経験、卒業研究における探求・解明の経験などから選択することになるが、働き方・学び方が多様な今、必ずしも選択肢をひとつにする必要はないと考える。つまり、働きながら教育研究活動に携わる、あるいは新しい臨床検査技術の開発・評価を行う、臨床経験を活かし社会人大学院生として学ぶなど、ハイブリットな選択肢は増えている。これらはスキルアップに留まらず、医療技術の開発により変化を続ける時代において、臨床ニーズに応えるための重要な要素である。当院では臨床検査に関連する教育研究活動および社会人大学院生を奨励しており、臨床検査技師の活躍の場のひとつとして参考になれば幸いである。